

# チベット（ラサ周辺）を旅して

—自然と文化の間で—

大賀二郎\*

はじめに

1990年4月から5月にかけて、中国チベット自治区のラサ、ツェタン方面に旅行した。

ラサは、1989年3月8日から1990年4月30日まで戒厳令が布告されていたが、1990年5月1日に約1年2ヶ月ぶりに解除された。私たちの旅行中、前半は戒厳令下であった。しかし、夜間外出禁止という以外、不自由しなかったし、トラブルもなかった。

チベットは、一般地域と違って、特に入域手続・健康保持・気象など配慮すべき問題があった。

入域手続と治安

まず、入域手続に手間がかかる。チベットに入るには、中国ビザのほかに、入域許可がいる。手続は通常成都で行うことになっているが、ほぼ1日かかる。戒厳令下では、報道関係用務や個人旅行には許可が下りなかったが、現在は入域許可そのものが不要になっているという。治安問題についても、一応赤ランプが消えたということになる。

ラサ大昭寺周囲には、八角街と呼ぶ大バザールがあって、種々雑多な露天で賑わい、大変な人出である。雑踏で五体投地をする人もいる。外国人とみると、どっと取り囲んで、「チェンジモニー」「ユー、ハウマッチ」と、次々と片言の英語をぶつける。日本語は今のところでは通用しない。ペンダント、木彫、ショールなどを押しつける。表情は必死だが、言葉や動作は以外と静かだ。雑踏にもまれていても、不安はなかった。

高山病に対する注意

つぎに高山病にならないよう注意がいる。チベット高原は海拔4000m以上が普通。航空機でいきなりこのくらいの高地に降りると、高山病の危険がある。最初の日にはせかせかと動かずに、高度順応が必要とされる。

ラサに入るには北京や上海からの便もあるが、現在は成都から飛ぶのが普通である。

成都は、近くに峨眉山をはじめ、名だたる岩峰に囲まれ

た海拔500mの都市である。ラサは海拔3,700mである。いきなり富士山頂に着陸するようなものであるが、成都から飛べば気圧差がわずかでも軽減できる。

高山病は、体格、年齢、経験などとはあまり関係なく、症状は突然やってくる。重症になると死亡率が高く、障害が残ることもあるという。私たちは、毎日脈拍を計っていた。100を超える危険信号だといわれている。

気象条件

もうひとつ、気象の不安定なことである。成都の霧。ラサの砂嵐。飛行条件はともに悪い。

成都は太陽がめったに顔を出さない。太陽が出ると犬が吠えるという。当然天候は不安定。ラサ行きの便は、通常、早朝にセットされているが、ロビーに待たされたまま夕刻になることも多い。

しかし、私たちは幸運にも、快晴の成都を定刻に出た。成都を飛び立つと、すぐにビルマ北方に重畳とした山脈の連続。コンガ山7,556mをはじめ白い岩壁が次々と展開する。正午過ぎ、まばゆいばかりのラサ空港に着陸。一行の歓声が上がった。

だが、私たちのバスはポタラ宮とは反対に一路低地に向かう。着いたところはチベットで一番低い町ツェタン、といっても海拔は3,200m。ここで高度順応のため一日休息。抜けるような快晴。もったいないが、ホテルのあたりでぶらぶらして過ごす。

ツアーは翌日からになる。古代王墓があるツェタンの岩山地帯、それから大河ヤルツァンポ河を渡って、最古のラマ教寺院があるサムイエの集落へ。最後にラサに向かう。

チベットの風物

殆んどが荒涼無辺のチベットの大地では、野の花や動物の姿を見かけることは少ない。風に乗って大地を渡るウスバシロチョウの清楚な姿や、祈るように岩場に咲く青い花。その出会いには大きな胸のときめきを覚える。それは無上に美しい。

荒涼、不毛、乾燥、沈黙……どの言葉もあてはまるように、チベットの自然環境は苛酷である。インド洋の湿っ

\* 神戸国際交流協会理事 博物館学芸員

た大気はヒマラヤ山脈に阻まれて、ここまでやってこない。乾き切った冷たい風が吹く。広漠とした裸の大地である。

この大地にあって、人は、その力のはかなさを思う。天に加護を求める心が生まれた。民は殆んどがチベット仏教に帰依している。寺院や民家の屋根、四辻の枝にタルチョンと呼ぶのぼりがはためいている。万物は地水火風空でできている。タルチョンはその象徴である。天に対しての願いが込められている。

むかし、チベットの天地には様々な悪霊や鬼神がいて、人に病や死や数々の禍いをもたらした。仏は使者に命じて悪霊たちを退治させたが、滅ぼすのではなく、慈悲をもって彼等を調伏させた。プータクマラ、カーラチャクラ、サンヴァラなど、今は護法神になっている。

寺院の中は、おどろおどろしい暗闇。怪異な形相の忿怒像が立つ。ローソクの光のなかで大きな影が天井でゆらめく。それにとどろ狭しと吊り下げられた曼陀羅の絵。輪廻転生が赤裸々に描かれている。漂うヤク油の異様な臭いのなかで、行僧の呪文が続く。そこは多重な密教空間である。

ラサはチベット仏教の聖地といわれる天上の都である。中央の丘に荘厳無比のポタラ宮が聳える。高さ110m、13層、ダライ・ラマの居城である。極端な外部のたたずまいにひきかえ、内部は廊下や階段が迷路のように入り組む。密教の極彩色の世界である。ラサ周辺には、ポタラ宮のほか、幾つかの大伽藍がある。河口慧海のたどり着いたセラ寺、岩山に壮大な建築美を誇るデブン寺、バザールの雑踏の中の大昭寺などその代表的なものである。

チベットの厳しい自然環境は、人間社会の形成に、また動植物の生育に大きな影響を及ぼしてきた。その分布や生態には特異なものがある。

#### ラサ周辺の植物景観

私たちが訪れた4月下旬のラサ、ツェタン方面はまだ一部に残雪があった。村落のあたりではしょう酒なアイリスが濃紺の花をつけていたが、山野草の多くはやっと芽を出し始めたところであった。

ツェタンはラサの東南195kmのところにある。蔵王墓などチベットの古代王の墓所があり、またタントク寺(昌珠寺)、ユムブラカンなどの寺院が散在する。

付近は累々とした荒地で、特にユムブラカンの岩壁には、団塊植物、蘚苔・地衣類の群落があった。イワヒバの一種も広域に見られ、日本のものに比べ小型である。乾燥期のためか、すべて葉を巻き込んで、外観は枯死状態であった。因に、北米ネバダ州のイワヒバの一種はトレハロースという物質を含有していて、何年も枯死状態にあるものが、一度雨が来ると一斉に蘇るといふ。この

チベットのイワヒバも、同様なことがいえるのだろうか。

宿根から芽が萌え出ているマメ科の草本があった。昨年枯れた茎が若芽を取り囲み、鋭い棘で護っていた。

このあたりに、他にベンケイソウの種類が豊富にみられた。ヒマラヤの青いケシと呼ばれるメコノプシス属は、ツェタンからヤルツェンボ河を渡りサムイエ寺に向かう荒地に、それらしい芽立ちがあった。現地の人はブルーポピーだといっていた。ラサ郊外のガンデン寺あたりの隙地に同種の群落があるといわれている。同寺院は文化大革命のときに徹底的に破壊され、今なおそのまま放置されている。中国人ガイドは、現地に案内することをどうしても承知しなかった。

一般的にチベットは高地乾燥ステップで、植物の生育環境としてはつぎの要素がある。地域は海拔が高く、そのため空気が希薄で紫外線が強い。更にステップでは雨量が少なく、風塵で地表が絶えず移動する。昼夜の寒暖の差もはなはだしい。このような環境では、種類も個体数も極端に少なくなっている。そして環境に適応してつぎのような特異な種が発達したと考えられる。

- (1) 寒さに対応して植物体を覆う細毛が発達した。
- (2) 花粉媒介の引受手になる昆虫類が少なく、その関心を引くため、花が異常に大きくなった。
- (3) 草食獣に対抗して、鋭い棘が発達した。
- (4) 紫外線を受けて、花色が鮮明になった。
- (5) 厳しい環境に適応して、形態の特異なものに進化した。
- (6) 厳しい風雪を避けて、うつむいた形で開花するものが多い。

このたびは観察できなかったが、次の種はチベットの環境で特殊化したものとして知られている。

*Saussurea gossypiphora* Don (キク科) は、チベットの特産種で、一面毛状のもので体表面を覆い、毛布のような効果がある。前記(1)の例である。

*Rheum nobile* Hook.f. et Thoms (タデ科) は、ダイオウの一種で、前者とはほぼ同じ環境下に育成する。包葉が穂状花を内にフレームのように包み込み、寒気を防ぐ。前記(5)の例である。

東部チベットの草本は、マメ科、ユキノシタ科、ツツジ科などが多い。ヒマラヤから中国、日本は、日華区系に属し、日本の種と共通するものが多い。

#### チベットの動物

私たちがよく目にしたのは、野生種を家畜にしたヤクであった。村落では荷役に普通に使われている。マンモスのように長毛で堂々としているが、岩場などでも機敏に駆け上がる。性格も柔順である。チベット族の生活はヤクとは不可分の関係にあり、肉、内臓、血は食用に、毛

は織物原料に、乳はチーズ、バター、灯油原料にそして糞は燃料や家屋の壁材料にされ、完全に利用し尽くされる。

ラサ市中には野良犬が異常なほど目についた。寺院の前やバザールの雑踏のなかで寝ころび、徘徊している。人間は宗教上犬に危害を加えないし、犬の方も供え物や店頭のをかっさらったり、吠えたりしない。それなりの秩序ができていらいしい。

#### おわりに

チベットは、荒涼とした不毛の大地である。しかし、乾き切った地の果てには向う岸の見えない塩湖や、渡るのに機関船で一時間もかかる大河もある。

精一杯に生きる人々の姿や、幻想的な密教寺院、祠や辻ではためくタルチョ。その背景に広漠とした空間が広がる。ここでは時間はゆっくりと流れる。

チベットの自然と文化は無辺である。ラサは天に最も近い都である。しかし、郊外のセラ寺の近くには鳥葬の巨岩があって、人骨が散乱しているという。ラサは都といっても、今なお秘境の地である。

チベット高原の殆んどは海拔4,000mを超える。この高さからは、白いヒマラヤは、肩から上だけが見える。神々の座が、すぐ近くでこちらを見つめているようだ。

雲は地上に影を落としながら、頭上を通り過ぎる。天はすぐそこにある。チベットの空はなぜか暗く感じる。雲ひとつない快晴の日は殊更にその感じがする。その蒼さのためであろう。岩場に寄り添う草本の群落。その花は空の色に染まったように青い。天に咲く花である。空間はどこまでも蒼く、深い。ここでは花は咲くというより灯っている。

#### 参考文献

(最近のチベットの自然と文化を紹介する文献として次のものがある。)

『地球の歩き方(チベット)』1988

地球の歩き方編集室 ダイアモンド・ビックス

『原色世界植物大図鑑』1986 北隆館

林 弥栄・古里和夫

『チベット』1981 林文碧ほか 中国人民美術出版社

『A SURVEY OF TIBET』1987

(English edition)

Dan Zeng and some others

Tibet People's Publishing House

『TIBET STUDIES No1』1989 (English edition)

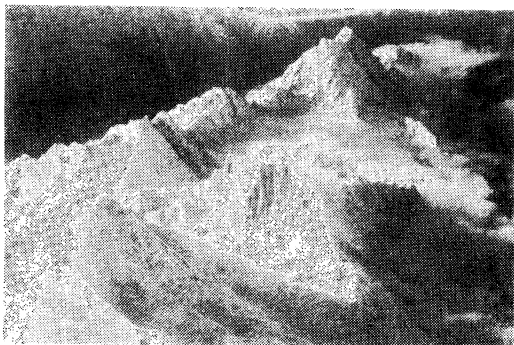
Ji Yuanyuan, Kun Dgar

China International Book Trading Corporation

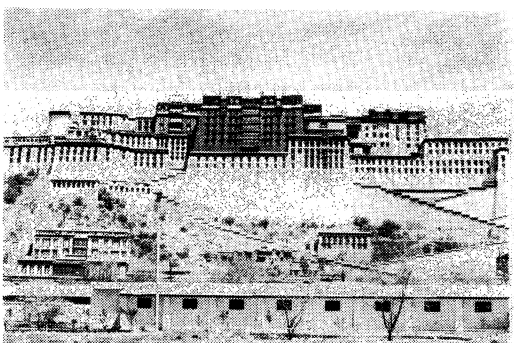
『TIBET STUDIES No2』1989 (English edition)

Ji Yuanyuan, Gun-gar

China International Book Trading Corporation



1 ヒマラヤ山脈(チベット南東部付近)



2 天に聳えるポタラ宮



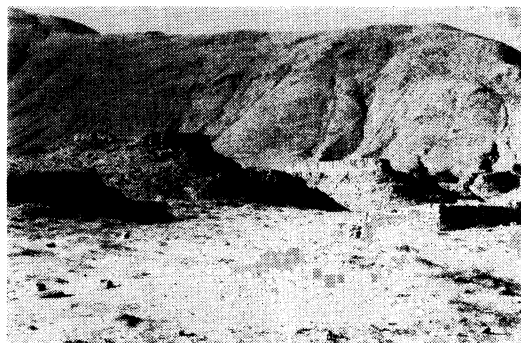
3 ポタラ宮からラサ市街を望む。



4 チベット最大のバザール八角街(ラサ)



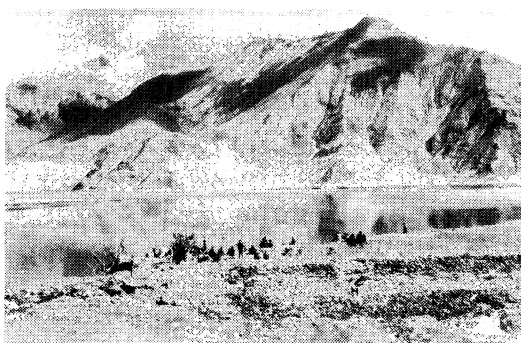
5 五体投地を行う人々(大昭寺門前)



9 チベット南東部はこのような裸山が広がる。  
また無名の砦や遺構が散在する。



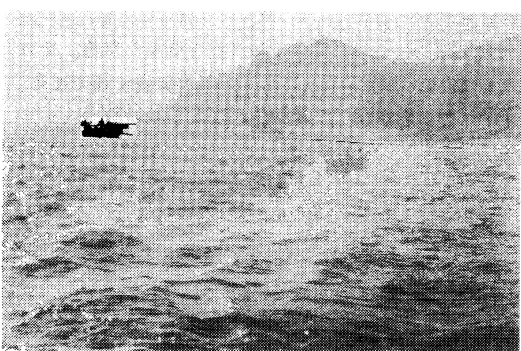
6 荷を運ぶチベットの少女(ツェタン)



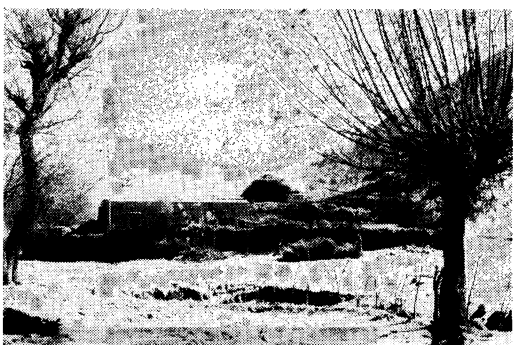
10 荒涼とした山間での小儀式



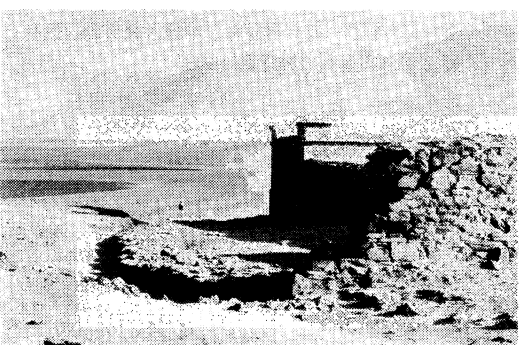
7 セラ寺背山のラマ教壁面とタルチョ



11 広大なヤルツァンポ河は渡るのに機関船で  
1時間かかる。



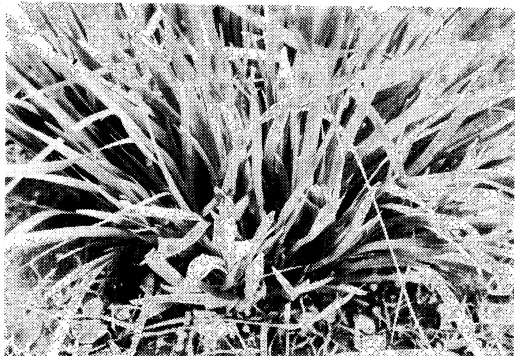
8 サムイエ村はむかしの日本の農村のよう。



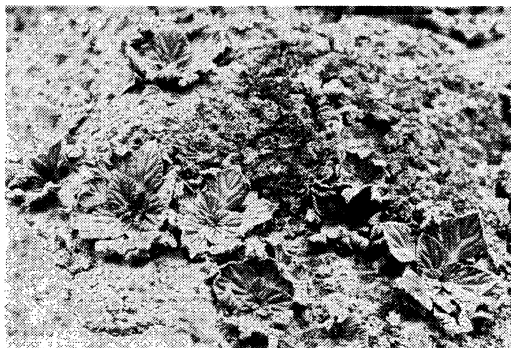
12 古代チベットの遺構



13 ヤクは急坂のガラ場を苦もなく駆け上がる。



14 アイリスの一種 (タントク寺付近)



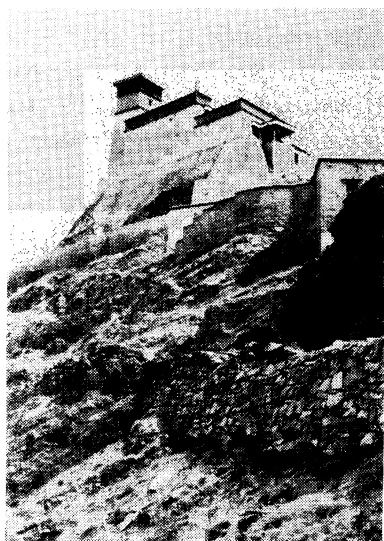
15 葉を団塊状に巻いて寒気や乾燥に耐える植物  
(ユムブラカン付近)



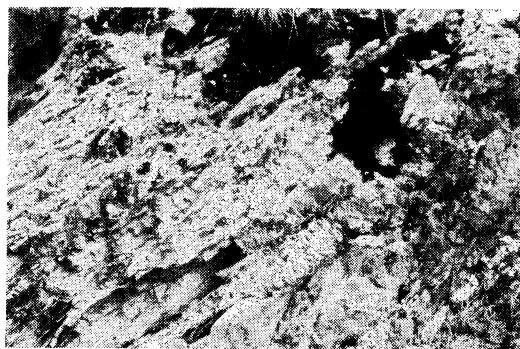
16 イワヒバの一種 (ユムブラカン付近)



17 鋭い棘で防備する灌木 (チョンギュー付近)



18 岩山に聳えるユムブラカンの遺跡



19 ユムブラカン付近を走るすさまじい断層